

特別活動における一考察

— コミュニティ概念を中心として —

杉山 直子

広島都市学園大学 子ども教育学部

要 旨

コミュニティ崩壊は現代においてグローバルな課題となっている。日本においても同様であり、新しいコミュニティのあり方が求められている。こうした課題のもとで、コミュニティの意義を人間の生物学的・社会的観点から探り、人権が尊重される社会の創造の概念であるケアやケイバビリティ、そして公共性とともに、学校教育における特別活動の新たな意義について考察した。

キーワード：特別活動，コミュニティ，ケア，ケイバビリティ

はじめに

ハンナ・アーレントが述べていたように、近代以降の個々の人間が孤立した社会的状態にあるという「アトム化」（原子化）は、21世紀においてグローバル化とともにますます進行し人間の生活環境に大きな影響を与えている。（杉山直子：2014）さらに進めて、本論文は、人間が互いに生きやすい社会の創造という視点で、共同体よりも規範や目的遂行における拘束が緩やかなコミュニティについて考察し、その形成能力を育む学校教育のあり方を示す。そのため、現代におけるコミュニティ崩壊・消失状態、新しいコミュニティ観の必要性とその条件、それらを培う学校教育の場について「特別活動」を挙げ、「望ましい集団活動」を通した人間関係づくりや集団・社会の中の一員としての個の発達の在り方を述べる。

1. コミュニティにかかわる問題

（1）現在の日本の姿から—コミュニティにかかわる課題

地方ではシャッターをおろしたままの商店や事務所が多く並ぶシャッター通りや住居者がいない家屋が増加し、歯止めが効かなくなっている。また、生活環境において人間的なつながりがますます少なくなっている。現代という時代は、地域社会のつながりのみならず、その場所・空間自体をも崩壊させ、人間のつながりを切ってきたといえよう。

コミュニティデザインに携わる山崎亮は次のことを示唆する。「まちの空間には、ふたつの寂しい歴史がある。そのひとつは、まちの生活が室内に取り込まれてきた歴史」であり、「もうひとつは、自分たちが担ってきたまちでの活動を他者の手に渡してきた歴史で

ある」。そうすることで個々の「生活は楽になったような気がするが、まちで生活する人と人との関係は、どんどん希薄になっているのも事実」という。(山崎亮：2013 p.12)

こうした状況は、産業・経済の変容による歴史的・社会的な人間たちへの影響であるが、多くの人間たちの要求の結果でもある。解放や自由を求める方向性が、個人的な利便性の追求、そして家や地域、集団・人とのかかわりという束縛からの逃走が、こうした状態をつくってきたともいえよう。

現在、地方における人口が激減しており、それがデータを持って日本の近未来像としてみえてきた。「地域消失」である。そうになると、人々と共に生活する場所さえもない状態になるどころか、人々がいないゆえに生活することさえもできない状態になる。我々に課せられている課題は、自分が生きるためにも、他者・集団が必要であり、そうした人々と共に、人々がいる場所や空間が必要であり、それを失わないためにも互いに生活しやすい環境をつくる力が必要なのである。(増田寛也編著：2014)

以上のような結果生じた大人社会の孤立化は、子どもたちにも大きな影響を与えてきた。山田浩之は、日本では1980年代以降、社会全体に価値観の多様化の現象とともに、「こうした状態が「島宇宙化」(宮台真司)や「分衆」(博報堂生活総合研究所)などと呼ばれ」、学校にも影響を与えたことを記している。教室の中も「島宇宙化」し、さらにグループが序列化され「スクールカースト」の形成もされた。こうした状況の中、学校は「なんとか単一の文化にまとめようとしてきた」。すなわち、「集団間の文化や価値観の違いを解消し、教室を均質な集団にすることが重要だと考えられてきた」のである。しかし、無理やりまとめることは困難であり、そうした指導がまた異なる問題を引き起こしてきた。(山田浩之：2014 p.16～17)

この問題の根源にあるのは、自分とは異質と思える他者の排除であり、具体的には暴力行為やいじめ、さらには不登校、そして自殺といった深刻な問題へとつながる。平成25度の調査結果は、小・中・高等学校における暴力行為は59,345件であり、とりわけ小学校10,896件(前年度9,322件)、中学校40,246件(前年度38,218件)と増加傾向にある。また、いじめの認知件数は、小・中・高・特別支援学校は185,860件である。不登校は小・中学校は119,617人、高等学校は55,657人、そして自殺は小・中・高等学校から報告のあったものは240人(小学校は4人、中学校は63人、高等学校は173人)という悲しい現実である。(文部科学省：2014)

こうした課題を引き受け、未来に向かい子どもたちが人間性を失わない生活を送るためにも、今、人間的なつながりがある場所・空間、すなわちコミュニティをいかにつくるかが日本における喫緊の課題なのである。その際、重要な視点が、生活当事者として、自分が所属する集団や場所・空間へ個々人が願いを持って参加することである。平成26年10月、政府は「まち・ひと・しごと創生法案」を提出し、政令化し、人口減少対策の一環として環境整備を行っていく。(内閣府：2014)しかし、「上からつくる」のではおそらく本来の問題は解決しない。重要なのは、一人一人の人間が当事者として主体的にコミュニティに

参加し、自分たちでつくることである。

例えば、地域コミュニティの場合を山崎は次のように述べている。「当事者たちに意見を出し合ってもらい、その意見を集約した上で、どうすればそれが効果的に実践できるのかを当事者自身が考え」、そこに住む人が解決することが求められる。(山崎亮：2013 p.23)

自分の所属する場所・空間について、何らかのまとまりのある姿とはどのようなものを、一人一人が主体的に考えること、さらに集団としても主体的に考えること、そして今の課題を発見し、自分たちの未来に向けて解決する力が求められているのである。

(2) 21世紀における人類の課題としてのコミュニティ

コミュニティにかかわる課題は日本だけではなく、現代のグローバル的課題でもある。

湯浅赳男は、人類は折り返し地点を迎えており、「もしこのことに気づかないならば、人間はポイント・オブ・ノーリターンを踏み越えてしまうかもしれない」と案じている。これまでの人類の過程は、「人類がその母胎から飛び出し、大地から浮き上がってゆく歴史」であり、「自然から社会」、「社会から経済」、そして「コミュニティから人間が浮き上がる過程」であった。今こそ、浮き上がった「社会を自然に」、「経済を社会に」、「人間をコミュニティに」と「埋め戻すことが、人類が生きのびるための課題」であると彼は指摘する。(湯浅赳男：2000 p.1～2)

ジェラード・デランティは、「社会・文化・政治の各領域で大変動が起こった結果、コミュニティが今や転換期にあるという認識」(p.3)を出発点にして、コミュニティ概念の今日的解釈が必要であることを述べている。彼は、コミュニティは今日において「グローバル化によって引き起こされた連帯や帰属の悪化と危機に対する一つの反応」(p.4)であることを踏まえて、コミュニティを歴史の中で変容するものと捉えること、ネットでつながるなど多様な性格を持っておりただ単なる特定の場所や集団と同一視することができない「流動的性格」であると理解すること (p.17)、そうすると20世紀の最後の10年からコミュニティは復活をしていることを述べている。(ジェラード・デランティ 山之内靖・伊藤茂訳：2012)

現在に生きる人間たちは共通に、自らのためにコミュニティを必要とする。それは、決して過去の定義・形ではなく、現在そして未来に生きていくためのコミュニティを探究することこそ重要なのである。

2. コミュニティとはーコミュニティ成立の条件

人間にとってコミュニティはどのような意味を持つものなのか。「コミュニティであること」の基本条件を探る。

(1) 生物学的観点

人間は人間であるゆえに、集団・社会をつくる。人間そのものの特徴として、河合雅雄

は、「家族という社会的単位」がサルからヒトへの進化の決定的な要素であるという。さらに、人間という生き物の特徴は「重層社会」をつくることにある。つまり、個人が直接集団や社会つながるのではなく、その間にもう一つ中間的な集団が存在するという構造により人間の独自性が初めて成立するという。(河合雅雄：1990, p.162～172) このように、人間の成立に、コミュニティは大きな意義を持つ。

広井良典は、こうした「重層社会における中間的な集団」こそがコミュニティというものの本質ではないかと唱える。このことは、まず「コミュニティはその原初から、その「内部」的な関係性と、「外部」との関係性の両者をもっている」のであり、このいわば“関係性の二重性（ないし二層性）”にこそコミュニティの本質がある」のである。次に、別の言い方をすれば、「「コミュニティ」という存在は、その成立の起源から本来的に“外部”に対して「開いた」性格のもの」で、外部とつながることで見“静的で閉じた秩序”が相互補完的な形で支えている（広井良典：2010 p.24～25）さらに、「コミュニティはその中心において外部へと“反転”する」。すなわち、「「コミュニティの中心」として歴史上重要な役割を担ってきた場所は、実はそうした意味での「外部」との接点、あるいはコミュニティにとっての「外に開かれた“窓”」ともいうべき場所」という役割を持ってきたのである。（広井良典：2010 p.91～92）

以上は、人間が人間であるがゆえにつくってきたコミュニティの共通点であり、コミュニティの存続にかかわる重要な点である。

まず、個々の人間が所属する家庭と、制度や法で成り立つ社会の間に、コミュニティが中間的な集団として存在する。そこは、家庭と社会の間をつなぐ場所であり、多くの他者が互いによりよい場所・空間を目指して、道徳的に判断し、自分の言動や態度そして考え方をつくる猶予がある場所でもある。こうした、中間的な集団の場で、個々人が主観と客観とを相互関係的にかわらせて社会を学んでいくのである。

例えば、学校というコミュニティは、新しい知識・技能を最新の科学・文化などから得て、外の世界とつながっている。また、学校内部のみならず学校外部においても役立つ技能や能力を育てている意味でも外部とつながっている。もしもそうではなく、学校が閉鎖的な場であり、学校内でしか役立たない知識や技能を伝えるならば、所属の意味を見いだせない。そうになると、学校外に魅力を見いだしたり、学校そのものを拒否したりすることとなる。中学生に多い、非行、不登校などの原因の一つともいえよう。

ただし、学校というコミュニティは、入学から卒業までの一定の期間のみの所属が求められる場所であり、教師という指導者が存在する。地域社会というコミュニティで求められる所属期間の長さや自由や責任は大きく異なる。言い換えれば、地域社会というコミュニティの練習期間として子どもには学校というコミュニティが存在するのである。学校も地域社会とともに、長期的・広範的に個々人が自分を取り巻く環境を考慮し、外部である社会へ願い・要求を出し、社会をよりよく創造していくのであれば、個々人が創造される。所属コミュニティの「内部と外部との動的な相互作用が、コミュニティそして人間の「創

造性」ということと重なり」(広井良典:2010 p.92), 個々人の人間としての創造と社会の創造, そしてコミュニティの創造がなされるのである。個々人が人間としての自己を取り戻したり維持したり創造したりするために, コミュニティが必要なのである。

(2) 社会学的観点

人間において重要な要素をもつコミュニティは, 歴史の中で様々な形と内実を持ちながら変遷してきた。そうしたコミュニティについて, 近代には次の概念が生まれてくる。それは, ゲゼルシャフトに対するゲマインシャフトからみえるコミュニティの概念と, アソシエーションからみえるコミュニティ概念である。以下, 湯浅赳男の『コミュニティと文明―自発性・共同知・共同性の統合の論理―』に依拠し述べる。

テンニスはゲマインシャフト(共同社会)からゲゼルシャフト(利益社会)への変化が近代の傾向であるとした。テンニスによれば, ゲゼルシャフトは, 「人間の選択意思により形成」され, 決して情意によって左右されない徹底的に理性的な思考によるものである。それに対してゲマインシャフトは, 「人間の本質意志によって形成」され, 思考によるものであるが, 情意にも包まれたもので, 「人間的自発的意思」ともいえる。テンニスがゲマインシャフトとしてあげている典型的なものが家(血縁共同体)や村落(地縁共同体), 都市・ギルド・教会(精神的共同体)であり, 「相互扶助的な共同体の行為が見られるが, 内部の秩序は身分と権威によって維持されてきたという」。これに対して, ゲゼルシャフトは交換社会であり, 契約によって成り立ち, 自由でもあるが孤独でもあり競争にさらされる。テンニスにとって近代社会はゲゼルシャフトという「偽装と欺瞞の社会」であり, そこでの「誠実な倫理的=社会的改革に期待」し, ゲマインシャフトが「見えない深層で人間社会を下支え」することを考えていたのである。(p.120~122, テンニス(1887)の『ゲマインシャフトとゲゼルシャフト』を参考文献としている。)

マッキーヴァーによるアソシエーションに対するコミュニティでは, アソシエーションは目的集団, コミュニティは地域集団として捉えられている。この場合の地域集団は伝統・権威・身分に縛られる社会と思われる。

さて, 各々の社会の必要な要素と改善すべき要素を踏まえると, ゲゼルシャフト化を続ける社会で, 目的を持った「自由意思による人間の交流, 集団(アソシエーション)形成」が「新しい人間的コミュニティの形成の原動力にならなければならない」。(p.123) 湯浅は現代においては「自由意思」を基本に置き, 「市民社会の中で人間性を実現しようとする人間的コミュニティの形成」(p.8)が必要であり, そのためには, 「対面的な関係」, 「構造的には, 自発性・共同知・共同性の三つの統合」が必要であることを主張する。この三者の統合は, 共同性と自発性を共同知が結びつける形でなされる。すなわち, 「共同性と自発性を結びつけるものは共通の知識, 経験, 文化, 伝統, さらにノウハウをも含んだ共同知=コモンズ」(p.3)であり, そこに住む人々は「人間として対面的に協力しあっていなければならない」のであり, 「この関係は決して外側から押しつけられたものではなく, 人々の内

面から自発的にあふれ出たものでなければならない (p.3)」のである。(湯浅赳男：2000)

コミュニティは極めて人間性を重視した場でありつつ、共同知を持つ過程において個や集団に自発性が引き起こされ、共同性が引き出されていくと考えられる。その際に忘れてはならないのが、個と個の対面性、情意などの極めて人間的な側面である。この人間と人間の関係性のなかで共同知を育むことで、自発性・共同性を伴い、コミュニティは形になり育っていくものなのである。筆者は、ここでいう共同知は、コミュニティにおける公共性の追究によって得られるものではないかと考える。また、コミュニティの創造における人間と人間の関係性に関しては、現代的な概念であるケアが重要な意味を持つと考える。

3. コミュニティを支える新しい理論—人間の関係性と個々の価値

(1) コミュニティの内実—人と人との関係性としての「ケア」

コミュニティでは、どのような人間の関係性が必要なのか、或いは、どのような人間の関係性がコミュニティになっていくのであろうか。

広井良典は、「ケア」を人と人との間の「関係性」と捉え、それは現在において「“克服すべき根本的な矛盾”ともいうべきものを抱えており」、「“古い共同体が崩れた後に、それに代わる「新しいコミュニティ」をどうやって築くか」という課題と重なる」と唱える。「[個人]の“底”に「コミュニティ」が、その底に「自然」があり、さらにその根底に「スピリチュアリティ」の次元があり、そうした次元に個人を「つないで」いくことがケアという営みの本質的な意味ではないか」。それは、「独立した「個人」の存在をしっかりと認めたとうえで、そうした個人どうしが、公共性というべき場（公共空間）においてさまざまなコミュニケーションをとり」、他者を「自分とは“異質な”、独立した存在ということを」確認したうえで、「言語」に重要な価値を置きつつ、自らを「開いて」いくような方向である。そこでは、複数の異なる主体を律する規範が本質的な意味をもつ。ケアは、このように二重の意味での「つながり」の役割を持つ。(広井良典：2005 p.224～225) 以上からわかることは、個とコミュニティとの関係においては、コミュニティとの一体化へと深めていくつながりと、公共性に基づく一人一人の関係性におけるつながりの二重の意味のつながりが必要であり、このつながりを持つことで、ケアは個とコミュニティを結びつけるということである。

個とコミュニティを二重につなぐケアは、どのような特徴をもつか。こうしたケアについて考える際に、品川哲彦は「生つまり存在が一切の価値の基盤」であるとし、正義と比較することでケアの特徴を見いだす。まず、正義の存立の基礎にケアがある。それは、ケアは人間と人間の間での最初の結びつきであり、ケアされた経験ゆえ、「連帯の拡大に役立つ」からである。「たがいをケアされる必要のある存在として、かつ、他人をケアするなにがしかの能力をもつ存在として自覚することで社会的関係は結ばれる」のである。(品川哲彦：2014 p.227～228) 次に、かかわる他者について比較すると、正義は一般的他者に対するものであるが、ケアでかかわる「他者とは現実に生きている個別の他者であ

る。」(品川哲彦：2014 p.238) その「現実には生きている個別の他者」とは身近な他者である。

では、価値の多様化がコミュニティの崩壊につながっているといわれるなかで、身近で個別の者同士が互いに求めるもの（ニーズ）に応じ、個々の人間を重視したケアを行うコミュニティをつくるには、どうしたらよいのであろうか。

(2) 個々の自由の保障・多様な価値からの選択—ケイパビリティ

コミュニティの中で構成員がケアの関係を続けるために、一人一人の理解が必要であるが、一人一人が異なる個々の人間であり、その個々の人間は各々の今を生きており、他者が価値をおくことが、今の自分には価値がないことがある。コミュニティの成立や持続のために、何らかの点において同じ方向性と共通性において強さを持ったベクトルをつくっていかねばならない。しかし、ケアの関係性であり続けるためには、個々の人間が、自分にとって価値ある生き方と公共的・社会的に価値ある生き方の間で、互いに同様な思いを持つ他者との関係性のなかで生きていかねばならない。コミュニティとケアは一見対立するようにみえるが、個々の自由の保障において、二者は統一される。

アマルティア・センは、「自由とは「本人が価値をおく生を生きられる」こと、より正確には、「本人が価値をおく理由のある生を生きられる」ことを意味する」とし広義な自由概念を構成している。それは、「自己にも他者にもその理由をつまびらかにしながら、ある生を価値あるものとして選び取っていくという個人の主体的かつ社会的な営みが、実質的に可能であることを意味する。」(アマルティア・セン 後藤玲子：2010 p.17)

この「本人が価値をおく理由のある生を生きられる」ことを、あらゆる状況を想定し、その困難さに対処するために考案されたものが、ケイパビリティ・アプローチ (capability approach) である。

センによれば、「ケイパビリティ・アプローチでは個人の優位性を、人が価値を認める理由のあることを行なうケイパビリティによって判断する」が、「ここでの焦点は、人が行なう価値があると認めることを実際に行なう自由にある。」(アマルティア・セン、池本幸生訳：2013 p.335) センのケイパビリティについて池本幸生は次のように述べている。センの考え方はアプローチであり、「個人が置かれている状況の「優位性」を「判断するためにどのような情報を用いればいいのかを示している」だけであり、ケイパビリティをどう使うかは我々に任されている」。「何が重要な「機能」であり、何が社会が保障すべき「機能」であるかは我々の議論にかかっている」のである。(アマルティア・セン、池本幸生：2013 p.588～590)

我々はどうのように議論し選択をしていけばよいのか。後藤は、多層的な構造を持つ個人の主観による選択や社会を構成する人々の社会的な選択において、「自己のなしうる多様な選択の中から、公共的な判断により相応しいものを選択しようという、個人のメタ評価」の営みがなされていくことの重要性を述べている。そのような評価を形成する理由を広く

公共的に問うような討議プロセスこそ重要であり、ケイパビリティによって、「主体的な問い」と「社会的・公共的な問いとの関連で、より深く吟味される側面、他者に対して説明する努力を通じて、理由がより明確化される側面があることも確かではないか」とする。(アマルティア・セン 後藤玲子：2010 p.20～23)

個々人の置かれている状況を理解し、必要とされていることとは何かを、理由を明らかにしつつ、主体性と公共性の間で問い、討議して本質に迫ろうとしていくことが、ケアという人間関係において重要であり、こうした人間の関係性が、今後のコミュニティの創造・存続に必要な不可欠なことなのである。

4. 21世紀の教育の課題—特別活動

(1) 場所に根ざす教育

グローバル化は、経済・社会・文化・政治などに広がり、教育にも大きな変化を引き起こしている。地球規模的な国家を超えた機関が推進力となり、国家を通して、各国の教育に影響を与えている。そうした現在、未来に向けて教育はいかにあるべきかを問うなかで、中野和光は次の点を挙げている。それは、「人材」「人的資源」をつくる教育ではなく、「全体としての人間の教育」を目指し、個々の子どもが自分の歴史的条件を乗り越える、生きていく力を身につけるようにすることである。(中野和光：2014)

中野が示唆するように、子どもたちを育てる方向性として、なにものかに使われるに役立つ人間づくりを中核にしてはならない。教育において、グローバル化という言葉に包まれた経済・国家優先の人間づくりであってはならない。グローバルを地球上の人間の共通課題と課題解決を探る方向で考え、子ども自身が過去から未来に向けた現在の意味を知り、社会の発展に向けた自己の位置づけ・役割を解り、今を問題解決的に生きることが重要なのである。学校という護られる場所で、現代という時代の解決方法を学び身につけていくことが、未来に生きて働く力になると思われる。

21世紀の課題について、過去の観点に縛られないコミュニティを創ること、グローバルという言葉に巻き込まれず、子どもたちが主体的に自分の課題を見つけ解決していく過程・方法が重要なことを述べてきた。この二つを繋ぐのが「場所」である。

中野は、「今日の社会の持続可能性は、環境の倫理の形成を必要とする」ことからアンフリーの言葉「教育と場所の形成は、同一の過程の二つの側面である。人生の主要な目的の一つは、われわれが住んでいる場所をよりよくすることである。それは、現実との知的交流を通してのみ達成しうる目的である」(Michael L. Umphrey (2007), *The Power Community-Centered Education-Teaching as a Craft of Place*, Rowman & Littlefield.)を用いて、「場所に根ざす教育」の必要性を述べている。(中野和光：2014)

「場所に根ざす教育」とは、今、子どもが生活している環境・場所を、よりよいものにしようとする過程こそを重要視とする教育であり、そうした過程が未来において社会を持続可能にしていく生きる力を子ども自身が得る教育になることを示唆している。こうした

場所に根ざし、環境をつくる教育、すなわち子どもが生活している家庭・地域社会、そして学校を人間的な生活の場所、まさに「コミュニティ」にしていくこと、そこでの倫理をつくるのが、現在の課題を乗り越える力になっていくと思われる。

(2) 今後の特別活動における指導

―身近な他者と、共同知をつくり、共同性を培い、「ケア」し合う関係性の構築へ

上記の場所に根ざす教育を学校の教育課程で主として行うのが、特別活動である。その特別活動では、「望ましい集団活動や体験的な活動を通して、豊かな学校生活を築くとともに、公共の精神を養い、社会性の育成を図る」という特質を持ち、それを踏まえ、「特によりよい人間関係を築く力、社会に参画する態度や自治的能力の育成を重視」した教育活動を行う。平成20年、21年の改訂では、「自主的、自発的な活動」の一層の重視、「自分に自信がもてず、人間関係に不安を感じていたり、好ましい人間関係を築けず社会性の育成が不十分であったりする状況」から「体験活動や生活を改善する話し合い活動、多様な異年齢の子どもたちからなる集団による活動」の一層の重視を図っている。(文部科学省：2008 p.3, 文部科学省：2009 p.2)

これからの特別活動では、将来的にコミュニティをつくる社会人へと育てることが喫緊の課題である。特別活動の内容である学級・HR活動を行う学級・HR集団は、生活を共有する。学級やHRは、学校における単位的な集団、家族的・家庭的な集団ではあるが、児童生徒にとっては、公共的であり、さらに社会的場所でもある。教職員により発達を見守られるというケアのなかで、家族的場所と社会的場所をつなぐ公共的場所としての位置付けを中心としつつ、児童生徒が自発的に共同知を育み、そのことで共同性を持ち、互いにケアをしあう経験をし、その際互いに個々の価値観の今・これからを見つめてかわり合う人間関係を体験的・実践的に学んでいくことが必要なのである。

おわりに

特別活動において、主体性や実践的な集団活動が重視される。しかしながら、現状においては、児童生徒の「主体性」が誤って解釈され教師の指導が後退したり、児童生徒の体験のみが学校行事として組み込まれたり、ときには急に教師主導のみになったりする。また、個の自由や価値観の多様性の解釈の下で放任になったり、学校文化の伝統や古くからの「らしさ」(中学生らしさなど)の要求の下で価値の強制になったりする。児童生徒が学級活動を中心とした特別活動において、外部とつながりつつ、内部で共同知を紡ぎ出していく過程のなかで、自らがコミュニティをつくる力が育つ。そこでの人間関係はケアであり、互いにケアパリティ・アプローチが必要である。「私たちが私たちであるために、そして成長するために、互いにしなければならないこと」を探究し、さらに共同知を重ね、共同性を学んでいくことで、望ましい集団活動になっていく。今後はさらに、特別活動における具体的なあり方を探るとともに、ケアやケアパリティ・アプローチの具体性を探

究していく予定である。

文献

- ・ 杉山直子：2014 「道德教育考4—ハンナ・アーレントにおける道德論—」 梅光学院大学『論集』47号
- ・ 山崎亮：2013（初版2012）『まちの幸福論—コミュニティデザインから考える—』, NHK出版
- ・ 増田寛也編著：2014 『地方消滅』 中公新書
- ・ 山田浩之：2014 「特別活動とは何か」山田浩之編著 教師教育講座第8巻『特別活動論』 協同出版（なお、広宇宙化は同じ価値観を持ったものだけで場を作ること。分衆は、博報堂生活総合研究所ホームページによれば、1985年に博報堂生活総合研究所編の「分衆の誕生」にて定義され、同年の新語に選ばれた語で、ある製品が普及し1世帯あたりの平均保有数が1以上になることをいう。たとえば自動車やテレビのように1世帯に1台だったものが1世帯に2台ないしは1人1台のように状況が変化することである。）
- ・ 文部科学省：2014 平成25年度「児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査」
- ・ 内閣府：2014 「まち・ひと・しごと創生法」が平成26年11月21日に成立した。この法案を作成した「まち・ひと・しごと創生本部」は、人口急減・超高齢化という我が国が直面する大きな課題に対し、政府一体となって取り組み、各地域がそれぞれの特徴を活かした自律的で持続的な社会を創生することを目指して首相官邸に設立されている。
- ・ 湯浅赳男：2000 『コミュニティと文明—自発性・共同知・共同性の統合の論理—』 新評論
- ・ ジェラード・デランティ 山之内靖・伊藤茂訳：2012 『コミュニティ—グローバル化と社会理論の変容—』 NTT出版株式会社
- ・ 河合雅雄：1990 『子どもと自然』 岩波新書
- ・ 広井良典：2010 『コミュニティを問いなおす』 ちくま新書
- ・ 湯浅赳男：2000 『コミュニティと文明—自発性・共同知・共同性の統合の論理—』 新評論
- ・ 広井良典：2005 『ケアのゆくえ 科学のゆくえ』 岩波書店
- ・ 品川哲彦：2014（初版2007）『正義と境を接するもの—責任という原理とケアの倫理—』
- ・ アマルティア・セン 後藤玲子：2010（初版2008）『福祉と正義』 東京大学出版
- ・ アマルティア・セン 池本幸生：2013（初版2011）『正義のアイデア』 明石書店
- ・ 中野和光：2014 「教育のグローバル化の中での教育方法」 日本教育方法学会第50回大会課題研究Ⅳ
- ・ 文部科学省：2008（平成20年）『小学校学習指導要領解説 特別活動編』『中学校学習指導要領解説 特別活動編』
- ・ 文部科学省：2009（平成21年）『高等学校学習指導要領 特別活動編』